

佐高信
経済評論家

自民党左派といわれた元首相、三木武夫の夫人、睦子が亡くなった。護憲運動の「九条の会」および「憲法行脚の会」の呼びかけ人となった彼女は、二〇〇三年一月五日付の『朝日新聞』で、アメリカのマリコ・テラサキ・ミラーと対談し、

「今の日本の首相は幼すぎて戦争とは何かわかっていない」と怒っている。

マリコも、これに、

「ブッシュ大統領も同じよ」

と応じているが、この傾向はますますひどくなっているのだろう。

幼稚な政治家たちは集団的自衛権見直しへ 市民たちが受け継いでゆく戦争批判の系譜

この記事につけられた見出しが「戦争の無残さ知る私たちこそ反戦を」。

大正生まれの三木睦子の遺志を受け継ぐように、昭和八年生まれの新田嘉一（平田牧場会長、東北公益文科大学理事長）が『潮』の七月号で、「日中友好の歴史の重み」について語っている。山形県酒田市にユニークな平牧三元豚の会社を設立した新田は「九条の会」にも参加しているが、ほぼ四五年度の中国との交流経験から、中国の人々の「スケールの大きさや豊かな人間性の虜になってしまった」と述べ、次のように続ける。

「とくにハルビンでは、多くの日本人も戦争で犠牲になりました。彼の地の人々は、日本人の遺骨を集めては埋葬してくれたのです。その史実を聞いた時は、なんと温かい民族なんだと、感動で涙が止まりませんでした」

戦争に行った新田の父親は、生前いつても、「日本の兵隊は中国でみんな悪いことをしていた」と

と辛そうに語っていたという。

「私にとっては、あの戦争は、どう考えても日本が悪く」

こう思う新田は、尖閣列島について徒らに

刺激的な発言を繰り返す石原慎太郎を直接指してではないが、中国を蔑視する日本の政治家やマスコミを次のように批判する。

「彼らは中国に対し威勢のよいことを言っているが、中国から反発を食っています。無責任は、中国から反発を食っています。その球を拾う極まりない。球を投げた人間は、その球を拾う度量がなくてはなりません。拾うということとは、うまく収めるということです。投げた責任は自分がちゃんと拾う。そういう度量のない人間は、最初から球を投げるなと言いたい」

わざわざ、アメリカに行つて、尖閣列島を都が買うなどと、なぜ言つた必要があるのか。

もし石原が本当に度量のある人間なら、北京に行つて、その発言するだろう。そんな覚悟は最初から石原にはないのだ。

寄付を募つたら、たかさんのそれが寄せられたらしいが、応じた人は、石原が主唱してメチャクチャになった「新銀行東京」の問題は忘れたのだろうか。

『世界』に連載されている田中伸尚の「未完の戦時下抵抗」は、九月号では、山形県小国の山奥で非戦を説いた鈴木弼美すけよしを取り上げている。

「国家の巨大な嘘の集積である戦争の本質を見抜き、騙されず、戦争を批判した無教会主義のキリスト者が、奥深い雪国にいた」と田中は書いているが、その基督教独立学園の創設者、鈴木弼美のことは、もっともっと広めなければならぬだろう。

考え方において自民党タカ派とまったく同じ野田佳彦は、集団的自衛権の見直しを行おうとしている。『世界』の同じ九月号の「メディア批評」が、そのお先棒をかつぐうとしていた国家戦略会議フロンティア分科会の委員名簿を記しているが、それによれば、『丸山眞男』（岩波新書）などを書いてある東大教授の対部直や京大教授の中西寛などが加わっている。事務局長がPHP研究所代表取締役専務の永久寿夫。PHPは言うまでもなく、松下政経塾ならぬ松下未熟塾をつくつた松下幸之助の始めた出版社。幼稚で無恥な野田佳彦や前原誠司は未熟塾の「留学生」である。